
コウモリ傘を乾かして

須江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コウモリ傘を乾かして

【Nコード】

N2354K

【作者名】

須江

【あらすじ】

BL。いろいろ詰め込み。カオスは友達！

サイドD

彼について僕が知っていること

目は黒

髪も黒

背は高からず低くからず

低く抑揚の効いた声

ひどく細身で少し猫背

不精髭は伊達男のつもりなんだろう、似合ってるからいい

年は27

笑うとき唇を左に歪める

はすっぱな口調。

それに見合った厭世観

それもあまり多くは喋らない

職業は画家、現在はもっぱら主夫

芸大を中退、学費がなかったって言ってるが恐らく嘘だ

学生時代一年くらいホストの真似事をしていた

父親がいない

そもそも家族について話そうとしない

今まで年上の人間とばかり付き合ってきた

金をもらったこともある

それを当然のことだと思っている

いつも絵の具の匂いがするけれど服には気を使う

白いワイシャツが似合う

エリック・サティが好き
時々ギターを弾く
喫煙者、酒はほどのどの
紅茶よりコーヒー
非常に少食

感情表現が希薄
そっけない

神も仏も信じない
でも僕が泣いているときは黙って傍にいてくれる
そして朝にはやたらと濃いコーヒーを淹れてベッドに持ってくる
僕を愛していて
なおかつ僕に愛されている

サイドH

彼について俺が知っていること

目は焦げ茶色

髪は黒

背は高い方、がっしりとした体格
早口で喋る

目がよく泳ぐ

鼻を鳴らす癖がある

冷静だが自信家の野心家
時々きつい皮肉を吐く

年齢は26

司法省勤務

いわゆるキャリア

大学は主席、ただし最初は神学科専攻

父親は若くして事故死

相当愛していたらしい

思い出を自覚以上に大切にしている

恋愛経験はまあまあ

むしろ仕事で寝る事が多い

出世のためなら誰とでも寝る
その事実をとても恥じている

常にガムを噛んでいる

仕事中は眼鏡をかける

ベルトよりサスペンダー派

大きな家と車を所有するのが夢

酒が好き、煙草は吸わない

二週間に一度カウンセラーに通う

すごく泣き虫

見捨てられることを極端に怖がる

上司と寝た日は、泣きながら俺のところに来る

必死でしがみついて、一人にしないでくれと声を絞る

俺を愛していて

なおかつ俺に愛されている

願望（前書き）

男娼の独白

願望

きみとハンガリーにいけたらいいのにな。

きみもしっているとおり、ぼくのとうさんはハンガリーうまれた。だからとうさんとかあさんがわかれたとき、ぼくはとうさんについてこのくだらないくにをぬけだすこともできた。あんなしきじょうきょうのかあさんから、きたないまちから、はなれてしあわせになることができた。

おかしいね、ちゃんとわかっていたんだ。このままここにいたら、かあさんとおなじいんばいになるって。それでもぼくはここからはなれなくなかった。

だってゼル、このまちにはきみがいるんだもの。

きみはぼくをいとこのひとりだっておもってるんだろうけど、ぼくはずっとまえからきみがすきだった。きみがちがうひとをすきでもきみのあかいくせげがすき。はつらつとしてるから。

きみのひくいけどはきはきたこえがすき。きいててきもちいいから。

きみのはいろいろのめがすき。いつもわらいかけてくれるから。

たとえそのかみにふれるのがぼくじゃなくても、そのこえがかたるのがぼくのことじゃなくても、たとえそのめにぼくがうつっていないなくても、ぼくはきみがいつとうすきだよ。

こんなにもきみのことをかんがえるのはなぜだろう。さいきんとかにおかしい。さかばでひとばんあいてをするだけのおばさんのはなしをきいていても、きみのすがたをさがしてしまふ。(とても、お

こられたよ！）ちがうおじさんにだかれていたときも、ふときみのことをおもいだしてしまう（ぼんやりしているぼくは、いろっばいんだってさ！）

あ、わかったよ。きみがけいさつかんになつて、このまちにかえってきたからだね。

ちいさなころは、そんなにきみとあわなかったから、あこがれてるだけだった。がっこうもちがったし。けどさいきん、きみはずっとぼくのちかくにいる。でんわしたらすぐきてくれるばしょに。

そしてきみは、ぼくがなかったらびつくりしてとんでくるんだから、なにがあつても。だからぼくはきたいしてしまう。きみのゆめをみてしまう。

わかつてるよ、わかつてる。ぼくだつてわるいんだ。しらないおじさんとワインをのむくらいなら、きみとコーラをのむよ。

あかのたにんのおばさんにアルマーニをかってもらうくらいなら、きみのそばでユニクロをきるよ。

そういえばたらしいのに、ぼくはワインもアルマーニもすきなんだ。こどもじゃなくなったから。それに、きみだつてそんなぼくをきにいつてるみたいだし。

むかしみたいにただきみをすきでいるだけじゃいられない。

でも、きみがコーラとユニクロでいいっていうなら。きみがぼくをみてくれるなら。

ねえ、ぼく、ぼくをだきたがるおじさんやかわいがるおばさんからかねをまきあげて、きみとハンガリーへいくよ。アルマーニもベントもロレックスもいらない。つつましくくらすよ。きみといっしょ

に。

きみがいいっていつてくれさえすれば。

ああ、うん、じょうだんだよ。ぜんぶ、ぜんぶね。わすれていいよ。

かまわないよ、ゼル。ぼくだってそれくらいしってる。

オーバー・ザ・レキシントン

眼が醒めたとき、彼はもうベッドの中になどいなかった。ブザーも鳴っていないしニュースで速報が流れたわけでもない。毎度のこととは言え悲しかった。皺のよったシーツの表面を撫でれば、本来ならもつと湿気ていたはずの手触りも薄れている。一番期待していたぬくもりなどなく、むしろ冷たいと感じるほどだった。一晚中点滅を続ける信号機の光がブラインドでスライスされ、馬鹿みたいに何度も手を動かす僕の手の甲に青白い縞模様で刻み付ける。手を動かすたびに、彼がここにいたのだという事実が薄れていく気がする。それは物凄く恐ろしいことなのに、僕は手を止めることが出来ない。感触が心地よいから。それだけの理由で。いつでもそうだ。僕ったら、感性に基づいて行動してる。それを認めるまでに大分時間が掛かったけれど。むしろ周りの方がよく分かるらしく、昔付き合っていた女の子になんか三回寝ただけで見抜かれてしまったほどだ。『理知的に見えるけど、案外そうでもないのね』。売女、淫乱、尻軽女。彼女の言うとおりで、確かに僕は理知的じゃない。あの時も尻に皺が浮かんだ夢見る瞳をまっすぐ見つめ、汚い罵り文句は一言も吐かず、黙って頬を思いつきり張るという手段しか思い浮かばなかった。それだけであのキャンディみたいな眼に涙が溢れて、僕たちの関係は流れていった。尤も今なら僕だって少しは成長したから、そうそう簡単に暴力なんて手段には走らない。落ち着いてこう言うてやれるのに。『このコックサカー』。

低血圧の可哀相な頭に血が巡ってから、惰性で機械的な行動に進歩はないという自己啓発本の台詞を思い出す。けれど僕は結局、ダメ押しで身を屈め、今まで撫でていた場所に顔を近づけた。鼻を擦ったのは埃っぽい匂いだけだった。仕方なくベッドを降りて下着を拾う。ベッドの狭い隙間に挟まっていて埃もついていたが、仕方ない。

焦っていたつもりはなかったのだけれど、といぶかしみながら足を突っ込んでから、僕は部屋のドアが本の薄く開いていることに気がついた。それだけで少しほっとするのだから、つくづく現金な性格だと自分でも馬鹿らしくなる。拒まれてはいない。そう思い込むことが出来る頭に乾杯。床を舐める明かりが象徴する希望をもっと拡大するように、僕はそっと、ドアを開けた。

予測したとおり光はキッチンから漏れていた。2DKの小さなアパートだから、ドアを閉めていてもどこに誰がいるか丸分かりになってしまう。本当は彼、身を隠したいのだろうと思う。今だって最低限に絞られた照明は、己の存在を吹き消したいのだと言わんばかりに慎ましい。けれどそんな事許さない、絶対に。僕は敢えて堂々とした足取りで廊下を進む。少しでも彼に僕の存在を知らしめるために。刻み付けるために。

覗き込んだとき、彼はシンクに両腕を突いたまま俯いていた。既にジーンズを履いていたし、シャツは椅子の背に引っかけかかっている。もしかしたらこのまま出て行こうとしていたんじゃないか。冷や汗を掻きながら、僕は向けられたままの後姿に近付いた。ぼんやりとした蛍光灯の中でも浮かび上がる、背中中の赤い痣を数えながら。一体何個つけてしまったんだろう。彼が嗜めるだけで、本気で怒らないとは知っているが、流石に気の毒になる。首の辺りにも吸い付いた覚えがあるから、彼はしばらくシャツのボタンをきっちり閉めた。ダサい格好で世間をうろつかなければならなくなる。

「起きてた？」

近付いてくるのだと分かっていたにも関わらず、彼は肩を震わせた。

「何でもない、早く寝ろ」

テーブルの上に佇む缶ビールは空なのに、彼の声は酷く掠れている。ずっと歯を食いしばっていても喉なんて渴くものなのだろうか。脇から肋骨が浮く寸前の胴にかけて、うっすらと汗が滲んでいる。舐めたい、と思うけれど、ないといわれた理知を総動員してただ背

後から抱き寄せるだけにする。身長は数センチしか変わらないのに、彼の方が肩幅と、腰のラインが女みたいに豊かだから、傍から見ればひどく不恰好な様になっていているだろうとは自覚がある。

「兄さん」

外面なんか気にしなくても十分歪なのだ、本当は。兄と弟が体を繋げるなんて。

「兄さん」

「ゼフ」

「しよう」

「嫌だ」

口では言うのに身じろぎ一つしない。抵抗もしなければ迎合もしないなんて、苦しくないんだろうか。それが僕に対してだけなんだと、本来はここ、悲しむべきどころ。けれど僕は嬉しい。僕しか知らない兄さん。大好きな兄さん。

「嫌だ、明日は」

「仕事あつたつけ？」

「ないけど」

「じゃあいいだろ」

僕に嘘をつかない兄さん。痛い所を突かれたら嘘すら言えなくて、黙り込んでしまう兄さん。かわいそう、かわいそうな兄さん。

どれだけ長い間ここに佇んでいたのかは分からないけれど、幸い体は冷え切っていない。ジーンズ越しにペニスを握りこめば、また歯を食いしばってしまう。今のうち、そんなことができるのも。汗で蒸れた髪に鼻を突っ込んで匂いを嗅げば首を振るから、動物みたいに首筋へ噛み付いた。こういうことをするのは犬だったかサルだったかライオンだったか、忘れたけれど、とにかく本で読んだのになにか子供用の図鑑の通り、歯形のついた場所を舌で舐め齧っていたら、彼は大人しくなってしまった。本当に服従しているかのよう。

少し芯を持っている僕自身のペニスをむっちりとした太股に擦り

つけたら、彼はシンクと背後の体に挟まれているにも関わらず、逃げようとした。手の甲が思い切りシンクにぶつかって呻き声を上げたら、反射的にごめん、と帰ってくる。襲ってる人間に謝るなんて馬鹿だなあ、と言いながら、振り返った顔に笑いかける。

闇みたいに真つ黒な瞳が涙で濡れていることに気付いたのはそのときだった。ぼろぼろとひっきりなしに零れる雫に、僕は思わずじんじんと痺れていた手に力を込めてしまった。ひゅっと吸い込まれた息に相反して、顔は酷くおびえ、くしゃりと一層歪んでしまう。

全く兆候も見せず、肩一つ震わせずに泣くことが出来るなんて、立派な特技に入るんじゃないか。

実は半分しか繋がっていない血筋のお陰で似てるだの似てないだの、回りの意見は千差万別だけれど、少なくともこれだけは兄と決定的に違うのだと言い切れる要素が一つだけある。僕たちのどちらとも寝たことのある奴が言っていたし、最近僕自身も自覚したから間違いない。僕はひどく火付きが遅い。というか、出鼻を挫かれると途端にやる気をなくす。まず相手がどう燃え上がるか見極め、相手が見も世もなく悶え始めてから上手く甘い汁を吸おうとする兄さんとは大違い、らしい。そんなねっとりしたセックスは嫌だと言えば、お前も大概しつこいと笑っていたから、やはり似ている……よく分からなくなってきた。

とにかく僕は、予想外の涙一つですっかりペニスを萎えさせ、彼を抱いてその場に座り込んでいた。今度の抱くって言うのは性的な意味じゃない、抱きしめるほうで。

「兄さん、兄さん。ごめんね、そんなに嫌だった？」

情けないくらい自らの声に動揺が混じっていると分かる。それでも彼は臉をかつ開いたまま涙を零し続け、ごめん、とか、許して、とか口の中で何度も謝り続ける。その言葉は確かに僕へ向けて吐かれているにも関わらず、瞳は薄暗い部屋の隅へ向けられていた。こんなとき、僕はどうしたらいいのか分からなくなる。おろおろしてしまう。ねえ、動揺するなんて兄さんの前でだけなんだよ。それだ

けは分かってほしい。

「兄さん、もういい、もういいよ、ごめんね、ごめんね、もういいから、もう……」

情けなくそう繰り返す僕の腕の中で暴れる元氣すらなく、けれど彼はやがて、震えるような吐息を一つ零した。くにやりと肩の筋肉が弛緩する。どすると僕の胸に後頭部を預けたときには、皮膚の薄い目元こそ赤くなっているものの、涙は止まっていた。

「——情けない」

先ほどよりも一層乾いた声で彼は呻いた。

「昔さ、後輩に『セックスの時に吐くんだけどどうしたらいいんだろう』って相談をされたことがあったんだけど、俺も今」

「吐きそうになった？」

「いや。けど、それに近かった」

そんなとんでもない相談を持ちかけるなんて一体誰だろう。見知った顔を思い浮かべても想像がつかず、けれど彼らしいと思ってしまう。

自分より年下の男は、何が会っても守ろうとするのだ、彼って奴は。それもこれも、僕を一度失ったせいだ。

「大丈夫だよ、吐いてもちゃんと掃除するから」

「やめろよ」

「それに僕も吐いたことあるんだ、それも何回も」

訝しげに見上げてくる瞳が酷く無邪気なのに、心を締め付けられる。僕はティディベアでも抱きしめる要領で、腕に力をこめた。

「男に慣れるまではね、どうしても慣れなくて。下から押し上げられたら上から出てくる、道理だろ？」

途端強張った顔を覗きこみ、僕は笑った。

「兄さんは吐かなかったね。我慢強い」

頭を撫でてやると俯き、それ以上は口を噤んでしまった。言い過ぎたかな、いつも思っけれど、辞められない。諦めてよ、何せ感性的派なんだから。

僕が金持ちの親父連中に体を売り始めたのは彼と引き離されたしばらく後だから、責任はあるようでないようで、けれど彼が裁きを受けた理由だって僕のためだったから結局善と悪を天秤にかけたら無罪の方に傾くんだとは分かっている。今まで散々村八分にしていた癖に、いざ正体を知れば眼をぎらつかせて襲い掛かってくるなんて酷すぎる。彼はあの時まだ、血の付いた服を着替えもしていなかった。ただ僕の手にはハーシーの板チョコレート握らせて、隠れてと言った。その三日前が、僕の誕生日だった。そして彼は、僕がチョコレートが好きだと知っていた。

家の外に引きずり出されるとき、彼は洋服ダンスの中で息を潜め、外を窺っていた僕をじっと見た。眼があった。向こうから僕が見えるわけなどなかったのに、確かに眼があった。じっと見つめた後、ごめん、と呟いて眼を閉じた。今みたいに。同時に僕も眼を閉じていた、強く、強く。

数え切れない怒声と肉を打つ音、骨を叩く音が聞こえる中、僕はずっと掌で顔を覆ったままそこに座り込んでいた。不思議と震え一つ湧き上がらなかった。どんな炎天下でも溶けないハーシーのチョコレートがポケットの中で粉々に砕けるのを感じた。

明け方、「奇妙な果実」になって風に揺られる彼を見上げながら、僕は砕けたチョコレートを齧っていた。喉が焼けそうなほど甘く、潰れたお陰で辛うじて歯の立つようになったチョコレートを無心に貪りながら、僕は連中の気配がするまで、ずっと彼の半分閉じられた眼を見つめていた。母さんがいた頃、動物園で見た剥製みたいだったという印象が未だに拭いきれないでいる。思い出すとそれこそ吐きそうになるから、僕はあの日以来一度もチョコレートを口にしない。

あの時眼を閉じたのは確かに兄さんだったけれど、今は一体何様のつもりだろう。幼い弟を守った崇高な殉教者、謝罪を続ける哀れな罪人。

それともねえ、幽霊？

「次はいつ来るの」

「いつでも」

解放された後も、彼は自ら口を開こうとはしない。質問をすればやつと答えてくれる。

「呼んだら来る」

「ずっとここにいて欲しい」

そう甘えた声で言えば、彼は黙って首を振った。

「これはお前のためだよ。探してるんだ」

「エクソシスト」

「そう」

Tシャツに首を突っ込んだ彼の言葉は、心なしかくぐもって聞こえた。

「こんなところにずっといるなんて、嫌だろう？」

「そりゃそうだけど」

部屋の隅に投げ出された掌はすっかり萎んでいる。一体どれくらいの時間が経ったのか僕には分からない。血が固まって、肉体が腐るだけの時間。

男娼が一人、姿を消した位じゃ世の中は騒ぎもしない。たとえそいつが客と喧嘩してワインボトルで殴り殺されていたのだと知った後でも。もつとも騒いでいるのかすら僕には分からない。

「また来るから」

零すように言う彼の言葉はそれが最後で、あとは全て塵気楼のように消えていく。

気付けば夜は明けかけていて、寝室はうつすらと青みがかった光に覆われている。今更眠る気にもなれず、僕は再び戻ってきたベッドの上で何度も寝返りをうった。

家賃を払ったばかりだったのは痛かった。月末だから、少なくとも正式に弔われるのはそれ以降、実際にここから抜け出せるとなると、いつになるかわからない。それまで僕は、エスコートサービスが来るのを心待ちにしてる淋しい中年男みたいな気持ちで彼の

訪れを待ち構えるしかない。思っているうちに何だか興奮してきて、先ほどの涙も蘇ってきたとなると、ああ、もういけない。なぜあのままねじ伏せて抱いてしまわなかったのだろうと後悔する。気付けば僕は、下着の中に右手を突っ込んでいた。

あのときの泣き顔を思い浮かべ、次にこのベッドの上でくねっていた背中を思い浮かべ、それからまたあの素敵な黒い瞳を思い出す。白けた天井をスクリーン代わりにして。

こんなサルみたいに欲情するの、ティーンエイジャー以来じゃないだろうか。手の中に飛び散った精液を眺め、僕は笑った。本当におかしかった。

レキシントンの幽霊だって、こんなに幸せなことなかったんだろう、って。

彼氏が殴るの（書きかけ）

「セックスが終わった途端に吐くんだ」

いわゆる風俗での失敗談とか昔付き合ってた女のアンビリーバブルな性癖とか、その類のノリかと思っていた。けれどソファに沈み込んだ彼の顔は真剣そのもので、俺は一瞬頭の切り替えが出来なかった。正直に言う。俺だって人並みには女と付き合ったり、エッチしたことはあったつもりだ。けれど、それらの経験値の蓄積の中で「吐く」という単語に遭遇したことが一度もなかったのだ。

ほろ酔い加減の頭でもようやく想像力を働かせることが出来たのはソファに戻ってからのことだった。向かい合う席へ乱暴に腰を落とし、作ったばかりのハイボールを抱えれば臨戦態勢。俺は両手でグラスを抱えたまま、大人しく彼の言葉を待ち構えた。もしかこれは長丁場になるんじゃないか、と怯える自らの心を懸命に叱咤しながら。

夏の初めのじめじめした空気は、エアコンを除湿モードにしたお陰ですっかり部屋から排出されている。そう思っていたのに、アルコールを嗜んだ男二人が発する熱量と、性的に充実していない男特有のねっちよりした雰囲気は、いつの間にか1DK全体を毒していた。新たに湧き出た汗がじわじわとシャツの背中を湿らせている。張り付く布地を心底気持ち悪く思いながら、俺はハイボールを一口含んだ。気のせいかな、先ほどに比べて薄くなる速度が上がっているように感じる。

「吐く」

角をなくしつつある氷を一つ、アルコールと一緒に口へ流し込み、彼の言葉を復唱する。なのに、どれだけ俺が寛容な姿勢を見せても、気楽な宅飲みをいきなり地獄の底に引き摺り下ろした張本人は掌で額を抑えたままで、うんともすんとも言わなかった。彼はザルとは言わないまでも酒に強いし、焼酎の水割りなんかでこれだけ酔いを

引きずるわけもない。無論眠ってなどいないことは、ロックグラスを掴む右手に籠った力の強さで分かっている。

「ベッドの上で？」

「は？」

「いや、ベッドの上で吐くの」

問いに持ち上がった顔は、正気なんてレベルを通り越していた。考えすぎて青ざめている端整な顔はしつかりしたもので、確実に俺の方がぼんやりした顔をしている自信がある。俺がもう一度言葉を繰り返そうとしたら、彼は顔の前で手を振りながらようやっと言葉を繋ぎ始めた。

「最初だけ。それこそた打ち回ったから、怪我でもさせたかと思つて震え上がったよ。でもそれが『癖』なんだって分かつて以来、ベッドではやってない。大概風呂場で」

「賢明だね」

「風呂場ならゲロを掛けられてもすぐ流せるだろう」

至つて普通の顔でそう言つてのけるものだから、危なく口の中のものが気管へ入りそうになる。

彼にはスカトロロジーの趣味はなかったように思う。それを踏まえて、さあ、普通彼女さんにゲロを引つ掛けられてこんな平静な顔をしてられるか？ 普通の顔だ。嫌悪とか、哀れみとか、一切なし。そうそう、彼は昔からそういう男なのだ。ぶっきらぼうに見えるけれど情が深い男。好きになつたら矢のように一直線、ひたすらまっすぐ飛んで行く。そして驚くべきことに、相手のことを心から思いやることができる、尊重することが出来る。なんとなくそれって、恋愛つていうより社会科の教科書に載つてる公民権とか、そういうものに近い気がするのだけれど。俺はそう思つて、今まで何度も口にしようにとすらしているけれど、幸か不幸か節度が押さえ込んでモヤモヤは心の中に折り畳まれたままにいる。

「俺に限らず、今まで誰とどんなセックスをしてもこうなるんだと」「どう考えても精神的な問題だろ、病院連れてけよ」

こういう場合は精神科か婦人科かどちらに行くべきなのだろう。

考えるまでもなく、彼は項垂れたことに意識が集中する。

「連れて行った。カウンセリングが面倒だって2回で逃げ出したよ」
「てか彼女さん、拒否らないの。それとも彼氏にゲロ掛けるのが好きなの」

「拒否る。でも弱いんだよ、感度がいいからすぐに断れなくなる」
嘔吐っていう部分にすら眼を瞑れば、ハーレクインを朗読しているかのような台詞。ああそうですか、と言ってやるのも憚るまっすぐな瞳で見つめられ、俺はいささか居心地が悪くなる。

フロイドかぶれとロボットミスト（前書き）

タイトルがそのまま内容。

フロイドかぶれとロボットミスト

近づく足音を敏感に察し、タイプライターの音が止む。青年がもたもたと身を翻すよりも早く男は椅子の傍らへと歩み寄っていた。仕立てのよいスーツが汚れることなどお構いなしに、ひび割れた石畳へと跪く。

「ひさしぶりだね」

ようやく緩慢な動きで男と向き合った青年は、微かに顔を傾けて微笑んだ。

「話したいこと、いっぱいあるんだよ」

「ごめん、今日は時間がないんだ」

謝罪が耳に届いた途端あからさまに曇った表情に引きずられるように男も目を伏せる。

「スイスで学会があるから」

「スイス！ローザンヌ！ああ、なつかしいなあ！ビジネススクールのクラスメイトでひどくケチなやつがいてね」

溢れる言葉は室内で反響し、曇ったガラス天井に入ったひびから青空へと抜ける。空いた隙間を埋めるよう差し込む午後の光のおかげで、青年の生白い頬はいつも比べ随分と健康的に見えた。庭の楓も散りかけ外ではそろそろ冷たい風も吹いているというのに、この温室は春も盛りのように暖かい。シャツに薄手のカーディガンと言う出で立ちにも関わらず青年の襟足は微かに火照り、彼の趣味にしては幾分甘ったるいオーデコロンの香りを一層濃く立ち上らせる。青年は透き通るような青い瞳を鈍く輝かせ、思い出話をとうとうと紡ぐ。

「——なんでも彼の、イタリアではあたりまえなんだって。ぼくはやめろって言ったんだけど。だってスイスでまかり通るわけなんかありゃあしないじゃないか、そんなはなし。無理さ、ああ、ああ、ぜったい無理。ああ、そうだよ」

けぶつた瞳をようやく僅かに落とし、青年はぱちぱちと瞬きをしてみせた。

「きみもそうおもっただろう？」

身を乗り出した拍子に机が揺れ、積み重ねてあった紙の束が一枚、二枚と舞落ちる。意味のない文字の羅列に視線を落とし、男は苦しげに眉を寄せた。溜まっていた息がこらえきれずに空中へと吐き出される。青年が大切にしているそれを拾い上げて丁寧に机へと戻してから、膝の上の握りこぶしに自らの手のひらを重ねる。子供のようにつくくらしした手は急なぬくもりに一瞬強ばったが、すぐさま緩んで指を絡めてくる。幼い頃仲良く小径を歩いた時のように。

「あのね」

男は精一杯の努力で青年の顔を見上げた。言いたいことは確かにあった。けれど全てが死に絶えたこの温室いっぱいに充満する温さが、胸を圧迫する。まるで頓着する事ない唯一の存在は、どこまでもあどけない顔で言葉の続きを待ち構えている。ぐっと眼を閉じ、そして開いてから、男は繋いだ手に力を込めた。

「君はいま幸せ？それとも不幸せ？」

降りた沈黙の重さに比し、見つめた先には穏やかな笑みが張りついたままだった。かつての彼なら想像も出来なかった柔らかさ。それは落胆と罪悪感になり、痛いほど胸を抉る。

しばらく考えてから、青年は聖者のように柔和で白痴そのものの笑みを顔面に広げた。

「幸せ」

そして顔を上げるでもなく、入口に佇む人物の名前を呼んだ。

「かれがいるから幸せ」

男が立ち上がった後も、しばらく青年は繋いだ手を離そうとはしなかった。無理に笑顔を作り、男はゆっくりと指先を抜き去った。

「戻ったらまた来るよ。チョコレートを持って」

体温が完全に離れようとした寸前に、青年は再び男の手を掴みなおしていた。繊細な作りのそれに真っ赤な唇をそっと寄せ、それから

幼子の仕草で頬をすり寄せる。甲に掛かる吐息が微かに震えていたように思えて、男は思わず唇を噛んだ。

「ありがとう」

長い睫毛を伏せ、青年は呟いた。

「また会いにきてね。チョコレート持つて」

そのまま俯いていたのは男が温室を出てしばらくの間だけ。待ち構えていた男と合流する頃には、再び小さな建物からキーを打つ硬い音が聞こえはじめた。

「元気そうで何よりだよ」

「たまには顔を見せろ」

お前の一族は薄情だと詰られ、思わず苦笑する。こうして時折訪れただけでも、自らがどんな表情を浮かべているか、全く気付いていないらしい。

「どうなんだ、実際」

「問題行動は皆無、飲酒も一切していない。時々敷地内で迷子になるくらいさ」最低限に剪定された金木犀の幹へ手を這わす。まるで青年の首筋を慰撫するかのよう。

「あと、念願叶って売れっ子の小説家になったって妄想に取りつかれてる」

「危険が及ぶようなことじゃないなら」

男は首を振った。

「彼はとても幸せそうだ」

「幸せだ」

振り返り様帰ってきた口調は、一切の疑問を許さない。

「お前には出来なかった」

あまりにもまっすぐな視線に、男は眼を逸らすしかなかった。

「そうだね」

向き合う顔に非難の色はない。にも関わらず彼の表情に怒りを読み

取ってしまうのは自らの責任だ。あるいは彼も本当に憤りを感じているのかもしれないが、それにしたってこちらに向けられたものは決してない。

お互いの感情の乱反射に射竦められ、二人は木陰で立ち止まった。

「僕は後悔していない」

やがて、彼は慎重に思えるほどゆっくり口を開いた。

「お前は違うのか」

「僕は」

男も詰めていた息を吐き出した。木漏れ日で斑になった相手の眼を、静かだか確たる瞳で見返す。

「僕の言うことじゃない、今となっては。君たちの間にある感情が幸せなら」

今まではばかりできた言葉が、するりと口からこぼれ落ちる。

「君はいま幸せ？それとも不幸せ？」

「幸せだ」

間髪入れず返ってきた答えに迷いはない。確かに事実だろうと思う。だからこそ、胸が掻き毟られるような痛みを覚えていた。

「後悔はしていない」

「そう」

再び閉じられたドアの前で立ちすくむしか、今の自らにできることはない。

「スイスだって？いつ帰る」

「再来週には」

皮肉に歪む目の前の唇を無視し、男はくたびれた笑みを浮かべた。

「いい加減、この事例を発表するべきかな」

「そうだな、学会の存在意義が根底から覆される」

久しぶりに聞いた冗句に少しだけ心は緩む。その隙を狙ったかのように、言葉は滑らかに痛みを与えてきた。

「また来てくれ。あいつはここから出ない」

二度と、と付け足された文句に息を詰めたのと、低い笑いが優しく

首を撫でたのはほぼ同時のことだった。

全て本当（前書き）

シヨタ注意

全て本当

シーツは既に取り替えられた後だった。アイロンでもかけたかのように皺一つなく、朝の光に晒されている様は余りにも無機質。触れることすら憚られるほど白かった。

白いといえば部屋全体がそうだった。養生のためにと日当たりのよい部屋を宛がわれていたので、満遍なくきつすぎないだけの陽光がベッドだけでなく家具や絨毯を暖めている。主がいなくなった後でも召使は水やりを怠らないのか、窓辺の観葉植物は青々と繁っている。準備は完璧。いつでも再び人が戻ってきて、生活を始めてもいい。その機会はまもなくやってくるだろう。

懐かしさを覚えていることは事実だった。なのに、まるで照らす白がこれほどまでに寒々しく感じるのはなぜだろうか。ライアンの後に続き部屋へ足を踏み入れたジョーは不審を隠すことが出来なかった。そろそろ風も冷たくなりはじめた外の方がずっと温かい気がする。確かに数週間前まで人がいた場所なのに、その痕跡はひとつとして見当たらない。いくら腕のよいハウスメイドでも取り除くことの出来ない人の気配をふき取ったのは誰だろう。一度か二度、見舞いのために訪れた時を除いてこの部屋へ足を踏み入れたことのなかったジョーイですら、この部屋の違和感を感じ取ることは容易だった。

「来週の火曜日、カーテンと天蓋と絨毯を変える」

ライアンの声は、この部屋へ忍び込もうと提案した時からずっと強張ったままだった。

「絵も。あいつは訳の分からない前衛芸術が好きだから」

この部屋を懐かしむことを、父親が喜ばないと知っているのだろう。共犯者を作り上げる弱さをジョーイは許した。彼がどれほど父を愛し、この部屋の主を愛していたかは知っている。感傷は今だけ。春休みが終われば学校へ戻り、普段どおりの生活が戻ってくる。帰

宅中に葬儀を済ませることが出来たのは幸いだったと父は言ったが、ジョーイはどう考えてもそれに賛同しかねた。

まるで物怖じすることなく、ライアンはベッドまでまっすぐに向かつていった。そこで立ち竦む。整えられた羽毛枕をじっと見つめ、拳を握り締める。仕立ての良いシャツの中で背中が強張っていると目で分かった。

のろのろと付いてきたジョーイは友人の1歩後ろで止まり、彼が再び動き出すのを待った。部屋に行こう。そう提案したライアンは、この部屋と同じく全くの無機質だった。泣きじゃくったのは葬儀の前日までだった。それでもう、涙は出尽くしたのだと言わんばかりに納棺のとき無表情で押し黙っていたのを発端とし、ここ数日ジョーイを不安がらせる冷静さを全面に押し出されては、断ることなど出来るはずがない。葬儀が終わった後、ライアンがジョーイに頼んだのは一つだけ。学校が始まるまで家に泊まってくれないか。ジョーイは承知した。話でも聞いてやればと傲慢なことを思っていたのは最初の半日だけで、ライアンは泣くことはおろか笑うこともなく、嫌いなはずの本を読んだり、そうかと思えば納屋で愛用の自転車を修理していたり。喋りかければ答えるが、もともと口数の多いほうではないジョーイと二人ぼっちとなれば、自然沈黙が広がった。彼なりの悲しみの顕し方なのかと納得するよう務めたが、どうしても蟠りが胸に残る。

しばらくの間ベッドを見据えていたライアンは、やがて手をシーツに伸ばした。ぴんと張り詰めたリネンに掌の熱を移すよう、一度撫でる。灰色の陰影が軌跡に沿って広がった。

「部屋の改装が終わったら、またこの部屋へ父さんが来るようになるよ」

まるで他人事のような口調だった。誰に語りかけているのでもない。どのような返事を与えたらいいか分からず、ジョーイはライアンの隣に立ち竦んだ。

「そうしたらまた、賑やかになるな」

何度も何度も寝台の上へ手を滑らせ、さざなみのように皺が寄つたのを見計らい、ライアンはどすんとその上へ腰を落とした。隣をぼんと叩くのに促され腰を下ろすと、少し高い体が肩によりかかってくる。

触れ合う耳と頬が熱いと感じた。もともと体格もよく、動くのが好きなライアンは確かに体温が高かったが、これほどまでだったろうか。

「あいつを殺したい」

まるで明るい声とは不釣合いな言葉にぎよつとする。そしてようやく、熱の理由を知る。顔を動かすなどといわんばかりにこめかみを強く押し付けられ、伸びてきた指に自らのものを絡め取られる。掌もやはり汗ばんでいたが、それはお互い様だった。

くつついた肌の間を生ぬるい水が滑っていくのを、ジョーイは眼を瞑ることで無視した。

「ライアン」

ただ、無性に胸が痛くなって、うつかり名前を呼んでしまった。それを合図とするように、タックルの要領で抱きつかれた。バランスを崩しベッドの上にひっくり返るとき、ライアンはこの場に相応しくない間抜けな声を上げた。それに思わず噴出せば、見下ろしてくる顔もやつぱり笑っていた。

真っ赤になった顔と、大きな瞳はまだ涙に濡れていたが、声にはもう、ほんの少しだけ生気が戻っていた。

「ばつかみたい」

「馬鹿じゃない」

解放された指先がシーツを掻く。それでも今この場でもう一度手を伸ばさなければいけないという義務に駆られ、ジョーイは怯えながらも頭上の頬に手を伸ばした。

「馬鹿じゃないよ」

雫が滴りそうな目元に指先が触れたとき、ライアンは擦ったそうに目を細めた。すぐさまそれは悪戯っぽく輝き、手は熱っぽい指先

に掴まれる。

掌はそのままズボンの前立てへ導かれ、押し付けられる。こんな時に勃たせるなよ、とあきれ返ったが、彼の手が自らのズボンに伸びてきたとなれば、もう仕方ない。

「仕方ない」

実際声に出し、ジョーイは引き下ろしたジッパーの奥に手をもぐりこませた。続きの、付き合ってやる、との言葉は唇の先で固まっていたが。

くだらない遊びは今までにも何度かしたことがあるし、二人はこれでも飲み込みが早かった。普段はまるで何もない顔で肩を組みふざけあい、女の子のお下げを引っ張ったり悪戯に精を出すのと同じで、いざスイッチが入るとお互いの良いところはすぐさ思い出すことが出来た。分からなくても自分の良いところを想像すれば良いだけだ。

「っ、ふ」

一番敏感な場所は曝け出せる癖に、声を出すのは恥ずかしい。唇を噛み締めたジョーイを宥めるように、同じく犬のように荒い息を吐くライアンの唇が近づく。ファーストキスはどなたでしたか、と将来聞かれたら、嘘をつかざるを得ない、お互いに。しばらく唇を擦りつけあっていただけだったが、結局焦れて唇を開けば、たどたどしい舌が潜り込んで来る。お互い下肢に集中しすぎてうっかり舌を噛んでしまったことなど何度か分からない。気をつけながら、ジョーイも不器用な動きで自らの舌を差し出した。かちんとぶつかった八重歯にすらも興奮する。

「ジョー、」

口元を唾液まみれにしながら、途切れ途切れにライアンが言った。「秘密、おしえて、やるよ」

熱っぽい吐息と共に耳元へ囁かれた言葉に、思わず手に力を込める。柔らかい耳朵を食まれて思わず声を上げたことも含め、それは結構な衝撃だった。

「・・・そんな・・・っあ」

「っ、うそ、じゃな・・・っ」

結局そのまま手の動きを早められて、負けじとこちらもやり返しの繰り返しでは、やがて重大なはずの話も流れていく。そのときは、ジョーイも深くは考えていなかったのだ。

結局彼がこのうちあけ話を思い出すのは、この部屋から再び持ち主がいなくなつてからのことだった。訊ねれば、きつとライアンは笑いながら言うだろう。

「当たり前さ」

まるで真剣な顔で告げられるのだろう言葉が疎ましく恐ろしく、結局未だジョーイは聞くことが出来ないでいたが。

「親友に嘘なんて付くわけないだろ」

ライアー

急に始まった行為。頭を抑えつける手の中で、オズは嘆くようなあえぎを吐き出した。始まる前から溢れっぱなしだった涙は今も止まらずクツシヨンに吸い込まれ、時々フローリングにも零れる。

「ケツ上げるよ、動きにくい」

動きやすいはずなどあるわけなかった。受け身の立場は初めてと言わない迄も久しぶりで、ろくに慣らしもせず突き入れられた場所は血くらい出ているのだろう。粘着質な音が増すたび、鉄臭さも強まった。一向に遠慮することなく、ラッドは腰を引き上げる。掴んだ分厚い手のひらは渴き、少しの熱を感じる程度だった。

「おら」

「く、ああ…っ…いや…っ」

ぴしりと頬を張られる。もちろん本気ではない。ただ背中と胸をひたりとくっ付けられた時、彼がこのこと自体は大真面目に行っているのだと分かる。ありがとう、温かい。また零れた涙を異質な指が拭う。

「泣くな。いいから」

胸が張り裂けそうな程冷静にラッドは囁いた。引く甘やかな声は愛情すら深読みできそうで、耳を食む唇も愛撫と見紛う優しさ。

「お前は悪くない」

「あ…ごめん…っ」

抱きしめられ、寄り添う顎に後頭部を擦り寄せ、オズは呻いた。

「ゆるして、ラッドごめん」

宥められた事に余計苦しさが増す。悲しいのは、辛いのは、彼も同じなのに。いや、もっと心は傷ついているだろうに。

「もういい、オズ」

こめかみに与えられた口付けはこの場に相応しくない荘厳さ。こんなものを受け取る資格なんてない。これじゃあまるで、さっきの言

葉が真実みたいで。この場限りの今だけの、嘘のはずのアイシテルを信じてしまいそうになる。

「ラッド……」

「ああ、分かってるって」

何故か笑ったような吐息を漏らして、ラッドは言った。

「愛してる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2354k/>

コウモリ傘を乾かして

2012年1月5日05時46分発行